

令和6年度 第1回「SAGA コラボレーション・スクール」
学校運営協議会（学校魅力強化委員会） 議事録

- 1 日時 令和6年5月17日（金）15：00～17：00
- 2 場所 本校 進路教室
- 3 出席者 <学校運営協議会（学校魅力強化委員会）委員>
企画運営部会：川島雄輔、生駒明子、市丸雄一朗、川崎真実、
前田勝久、早川加恵
地域協働部会：原雄一郎、梅野忠洸、多貝利彦、徳川清隆、
前田真也、松田毅、山下裕子、徳留嘉寛、真木圭亮
校内委員：岡本隆、中西美香、山口崇、末松真樹、檜崎由紀子、
森山千鶴

4 会順

- (1) 学校長挨拶（学校長）
- (2) 出席者紹介（自己紹介）
- (3) 本年度の学校運営協議会の体制について（教頭）
- (4) グランドデザインについて
- (5) 令和6年度学校評価計画について
- (6) 1年生「総合的な探究の時間」について
- (7) 議題

地域協働部会におけるコーディネーター的な役割をどう構築するか。

5 今後の予定

◇第2回 令和6年7月9日（火）15:00～17:00

企画運営部会・・・学校評価計画報告、地域協働部会・・・総探での連携・協働
第一学年「総合的な探究の時間」での発表会（予定）

◇第3回 令和6年11月12日（火）15:00～17:00

企画運営部会委員…学校評価中間報告 地域協働部会委員…総探での連携・協働

◇第4回 令和7年2月14日（金）15：00～17：00

企画運営部会委員…学校評価最終報告 地域協働部会委員…総探での連携・協働

※企画運営部会の委員の方も、総探へのご参加やご支援をお願いいたします。

6 その他

議事録

(1) 学校長挨拶（学校長）

皆様こんにちは。令和6年度第1回学校運営協議会のご案内をさせていただきましたが、お忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。13名の委員の皆様、昨年度から引き続き委員をお受けいただきましてありがとうございます。今年度から新たに佐賀大学の徳留先生と九州産業大学の真木先生のお二人に委員として入っていただくことになりました。地域との連携や大学との連携というところで新たな光が見えるのではないかとということで私も嬉しく思っています。

さて、令和6年度がスタートして1ヶ月半ほど経ちましたけれど、学校の方の様子をいくらかお話しさせていただきたいと思えます。4月9日に160名の新生を迎えて、新たなスタートを切っております。現在在籍457名となっております。4月26日金曜日には双松祭の体育の部を実施しました。雨が心配でしたが何とか持ってくれて、本当に充実した体育大会となりました。

今年度の学校の大きな改革が一つあります。昨年度まで授業1コマ50分でしたが、今年度から5分短縮して1コマ45分にしました。下校時刻も19:30でしたが、30分繰り上げて19:00にしました。生徒や教職員が余裕やゆとりを持って学校生活を送れるように、このような形にさせていただきました。自由に使える時間が増えたということで、生徒達に好印象のようです。

また、新年度の入学生から新しいコース制のもとでの入学ということで、本格的にコース編成に向けての探究活動などの様々な活動がスタートしています。全体の流れについてはこの後説明があると思えますが、1年時は経験を積むことでどんなことに興味があつて、どんなことを勉強したいのか決める段階と考えています。具体的な動きは2年生になってからになると思っています。少なくとも10月11日には具体的な考えをまとめ始める大切な時期になってくると思っていますので、学校運営協議会の委員の皆様のご協力が必要になってくる場面が大いにあると思えますので、どうぞよろしくお願ひします。

本日は、特に7番目の議題として挙げております「地域協働部会におけるコーディネーター的な役割をどう構築するか」というテーマで委員の皆様にご議論をしていただければと思っています。忌憚のない意見を出していただき、有意義な会議となりますようよろしくお願ひいたします。

(2) 出席者紹介（教頭）

- ・各自で自己紹介

(3) 本年度の学校運営協議会の体制について（山口）

- ・資料P3、学校運営協議会の目的の説明。
- ・P4、規約の訂正。（庶務）を第9条、（その他）を第10条に訂正。別紙の説明。

- ・別紙の説明。今年度学校運営協議会の委員 15 名、川島雄輔様に会長、原雄一郎様に副会長。
- ・各部会の担当と主な役割の説明。企画運営部会は学校運営協議会の方針、学校評価を行う。総合的な探究の時間の支援。地域協働部会は探究活動の伴奏支援やフィールドワークの支援、地域との橋渡しといったコーディネーターの役割。
- ・山口が窓口。委員さんの横の連携も密に取っていただきたい。それ以外の方々もラーニングパートナーとして関わっていただきたい。
- ・成果指標の説明。本校をお勧めできると答える生徒 70%以上、協力してくれる大人が地域にたくさんいる 90%以上、活動などで人に話を聞きに行く 45%以上。
- ・探究の意義の説明。

(4) グランドデザインについて (校長)

- ・グランドデザインの説明
- ・運営委員の意見を仰いで最終的に提出することになっている。
- ・SAGA スクールミッションは県からの通知。
- ・3つのポリシーは確立されたものがあるため、大きな変更はない。グラデュエーション・ポリシーにいくらか小さな変更。地域課題は地域探究進学コース、自らが立てた課題は学際探究進学コースに対応。

(5) 令和 6 年度学校評価計画について (教頭)

- ・学校評価計画の説明
- ・主な変更点は 2 つめ。学校教育目標から SAGA スクール・ミッションという表記に変更。それを受けて、3 つめに、スクール・ポリシーが追記。
- ・●は県の共通の目標、星印が唯一無二の誇り高き学校づくり。

A 委員：グランドデザインの中で、リーダーシップを高める部分が見えてこない。
どの辺りが指しているのか。

校長：学校としては計画力の部分がリーダーシップにつながると考えている。

A 委員：計画の中に私たちのアイデアを入れ込んで頂けたらと思います。

B 委員：探究活動の成果を評価計画に入れたいか。進学実績の向上の部分、学力に頼らない試験の合格実績も入れて行った方がいいのでは。

教頭：どういった選抜方法で合格したかを踏まえながら評価結果に入れていきたい。2、3 年後には探究の成果指標も見える形で入れていきたい。

C 委員：心の教育の部分について。ハナコフェアの取り組みについていければ、唐津西高校独自の形になるのでは。

教頭：具体的な取り組みの部分に追記し、目に見える形にしていきたい。

校長：5 月 2 日の創立記念式典には毎年の中尾ハナさんの話を入れるようにしている。6 月の

半ばには、命の大切さにつながる講演会をしている。

D 委員：鬼塚小時代、プール開きの際にハナコさんの話をしていた。西高の生徒会が来て話をしてくれるという交流があった。

(6) 1 年生「総合的な探究の時間」について（山口）

- ・ 探究支援部の年間方針の説明。まず探究をやっていく環境を構築していきたい。教育活動全般を探究に結びつけていきたい。双松学と名付けている。
- ・ 授業だけでなく、ボランティア、キャリア教育、探究を含めながら学校だけではできない活動を進めていきたい。
- ・ 将来的には西クルシステムというサイクルを委員の皆様と構築していきたい。
- ・ 今年度の 1 年生の総合的な探究の時間の説明。
- ・ 2 年生になった時、コースに分かれる。選ぶためのテーマを設定することが 1 年のゴール。
- ・ 1 学期は地域探究に力を入れている。2 学期は学際的な探究に力を入れ、自分の興味関心や課題解決についてやっていく。3 学期の初めにテーマを設定し、コースを選択する。

(7) 議題 地域協働部会におけるコーディネーター的な役割をどう構築するか。

B 委員：地域協働部会の役割を説明して頂きたい。

山口：昨年度、総合的な探究の時間に関わっていただいたように、今年度も地域協働部会の方に関わって頂く予定。本校の課題（3 つ）、全体計画等をベースに議論していたらと思っている。

B 委員：探究のサイクルの中で地域協働部会がどう関わっていくかが課題。自分自身どんな動きかわからないので質問したい。テーマ設定は個々でやるのか、全体でやるのか。フィールドワークに関して、自分のテーマに沿わないコースしかないメンバーはどうしたのか、昨年度の実績について教えていただきたい。

山口：昨年度は地域のことを知ろうということで、委員さんに地域の魅力について語って頂いた。フィールドワークの行き先を 5 つ設定。7 月に行った。地域の魅力についてグループワークする中に部会の人に入っていただいた。個人で見つけた地域の魅力について 10 月に発表会に行き、委員さんにも講評をいただいた。魅力が見つかる課題も見つかる。1 年生の後半は課題を解決してより魅力を高めるというテーマで探究を行った。発表のスタイルについても、このテーマはこの人に発表したいというふうに考えさせた。委員の原さんに発表、市役所の観光文化課に発表などを行ったグループがあった。

B 委員：今年度はどういう形で関わっていけばいいかの議論。テーマ設定時にどういった視点や気づきを与えられるか。取り組みやすさや成果の出しやすさを考慮して与えていけないといけないか。どう関わっていけばのアイデア。やり方を含めてご意見をいただけたら。講演した方の意見等もいただきたい。

- E 委員：検討すべきことは、1年生がどういうふうに進めて行けばいいかということ。
スケジュールに最終的なゴールがテーマ発表になっているが、テーマがどれぐらいの言葉のレベルなのかを共有できれば、どういった関わり方ができるかが明確になる。
- 山口：生徒にもよる。どういうレベルかまでかは設定できてない。
- E 委員：探究はゼミと似ている。アウトプットのイメージを先に示した方がいい。それがないと何をどこまでやったらいいのかが分からない。1年生はやり方を習得する時期。
構造化されたやり方を示し、導くことで2年生以降進めやすくなる。
- B 委員：どういうゴールを示したらいいかの意見はありますか。
- C 委員：総合型選抜・学校推薦型選抜でどういうプレゼンをするか、どういう論文を提出するのかを一つのゴールとして、逆算で何をしていくかと考えるのが学校としてやりやすいのでは。総合型・学校推薦型を受けないにしても経験になるので、160人を捌くためには、総合型選抜をイメージしたらいいのではと思う。
- F 委員：地域の魅力は漠然として思い浮かばない。他人を幸せにする活動などと伝えれば、具体的に動きが出てくるのでは。短期的だけでなく、長期的な課題の解決について考えさせてもいいのでは。
- G 委員：最終的なゴールがテーマ発表だと勿体無い。考えてやらせてその結果を持ってどのように考えたかというところまで持っていかないと、探究のサイクルが回せない。
2年間でやっていると遅い。
- E 委員：おっしゃる通り。小さなサイクルを回していく。ゼミでは100サンプルを集めなさいと言っている。その中でテーマがドリフトして、深まっていく。ラフでいい、回していくことで深まり、具体的になっていく。他者からのレスポンスを受けて、ショートサイクルを回していくことが大事。
- B 委員：シミュレーションする中で変わっていく。集まって質問を受け付ける機会を設け、問答する機会を入れてみたらどうでしょうか。
- A 委員：このカリキュラムは初めて。明確にしないと生徒が迷う。プロセスを歩ませていくファシリテーター役が必要。生徒が話し合いながら揉んでいかないとボヤける。
- B 委員：160人いる中でどう深めていくか。
- G 委員：うちでは5チームに好きなことをやらせている。最初にまず何をしたいか、どうするかという目的と目標値を決めさせている。自分の役割も決めさせている。最終的にどうだったかを考えさせ、発表させる。グループの中でリーダー、経理、広報、連絡係やりたいことが違う。結果を踏まえて、地域的な課題や学術的な課題を考えさせていく。
- H 委員：少人数のグループの方が有効性があると感じる。子供達の希望に応じた少人数のグループを作った方がいい。
- 中西教頭：これまでの経験でも、グループの方が意外とコミュニケーションや役割ができて良かった。グループも意図的に分けてみたら、同じような生徒達が集まってよかった。ゴールのイメージが出てこないのであれば、他校でやっていることを見せるの

もいい。

I 委員：自然にグループができていくのはいいが、最初からグループはいいと思わない。大人は完成させてあげたい、ゴールさせてあげたいという思いがある。一年目は一年目の仕上がり方でいい。1年目より2年目の方が進んだように、生徒のペースで進んでいける見守り方をしたい。テーマ発表の時に、事例を見せてあげるといい。中間でいくつかの発表団体を見せて、自分で気づくのがいい。

B 委員：色々な意見をありがとうございます。探究は全員同じ時間でやれるのか。

山口：火曜日7限目にできる。足りない部分は、ゆとりができた放課後などに。

B 委員：クラスの縛りは発生するのか。

山口：昨年度は後半はクラスの枠を無くし、グループごとにやらせた。

B 委員：今年度はどこまで動いているか。

山口：今年度は3時間行ったが、まだ導入の部分。

B 委員：今の時期にすんなりとグループを作れるのか。

山口：4月に体育祭を行うなど、交流の場があったので、どのクラスもいろんな人と接点を持っているので大丈夫。

B 委員：どのような導入の仕方で持っていけばいいのか。

H 委員：昨年度は自然発生的にグループ化した。

山口：そういう導き方をした。同じようなテーマを持っている生徒で集まり、5人グループを作らせた。

H 委員：流れとしては、作業をしていく中でグループ化していくのが自然でいい。

J 委員：流れ的には自然発生的なグループ化、小さなサイクルを回す仕組みを作っていくのが現実的。

B 委員：自由に縛らないでさせる方がいいのか、ある程度導く方がいいのか、どのようなやり方がいいだろうか。

G 委員：理想は自由にさせる。興味を持ったことをさせる。一人は問題があるかもしれない場合は最小単位を作っておく。

E 委員：最初からグループにしてしまうと何もしない人が出てくる。最初は個人でやらせて、どこかのタイミングでリスト化して、その中でグループにしていくとやりやすい。最小人数をどうするかという課題がある。配慮を要する生徒もいるので、個人でもグループでもいいというある程度の自由選択をできるようにする検討が必要。

K 委員：大学一年生を見ていて、やりたいことをやれる学生はほぼいない。ある程度方向づけをしないと難しい。人数についてはどちらでもいい。160人全体では難しい。どこまで考えられるのかについては不安を感じている。

G 委員：やりたいことを手を挙げてと言って手を上げる人はいない。どうしているかというところ、ハードルを下げ、ボランティアに参加してみませんか？と言っている。ボランティア証明書を発行している。高校生を動かすにはインセンティブが必要。そういった仕掛けが必要。はじめに、まずやってみたらということで、ある程度のテーマ設定は

必要。

K 委員：柱がいくつかあって、新しい柱も作っていいよという形でやっていくしかないのではないか。

G 委員：ゆるさを作っておけばいい。その中でやりたいことが出てくる。

K 委員：その通り。動き出すと、やりたいことが出てくる。最初のきっかけ作りが難しい。

G 委員：どこかで強制から自由に変えるなど考え直すタイミングを作ったらい。

L 委員：昨年度、唐津の魅力と言われても・・・、生徒達が何をしたらいいんだろうという空気があった。きっかけづくりが難しい。利益がないとなかなか動き出さない。やる気をそそる何かが必要だと感じた。

K 委員：卒業して母校がいいことが分かる。卒業生に手伝ってもらうのがいい。

G 委員：同窓生の間で、西高生が自主的に参加できるプラットフォームを作ろうという話になっている。

6 その他

・教頭より、今後の部会の説明。

C 委員：ボランティアの連携について。本校で西高を希望する生徒の大多数がボランティア活動ができるからと答えている。中学生に魅力的に映っている。ボランティア部の生徒、兼部してボランティアに参加している生徒を中学生が見ている。ボランティアを活用して、その先の進路に繋げることができるのが魅力。保護者にとっても魅力的。学力検査で行けるのは半分以下というのは保護者は知っている。ボランティア活動から、地域の課題を考えたり、地域にどう関わっていけばいいかを見出してくれるのではないかと親御さんは期待している。体験だけで終わらせないことが、西高の強みになってくる。他の高校でも西高のボランティア部と似たようなボランティア部が立ちがっていく。

M 委員：3年前、西高で自分を知るワークショップを行った際、高校選択の理由でボランティアと答えた人が結構いた。外から見えていても、西高はボランティアのイメージがある。

G 委員：横の連携をするために、グループラインを作ることを検討してもらいたい。

教頭：委員会で自発的に作っていただきたい。